

疑遲の創作活動—『新民胡同』の批評を兼ねて

李 青

2001年に時代文藝出版社（中国・長春）から東北淪陥時期（被占領期）の老作家疑遲の長編小説『新民胡同』（全337頁）が出版された。本書では劉遲というペンネームを使用している。本稿では淪陥時期に広く知られていた名前疑遲で統一したい。

本書の早期出版のため、奔走、尽力した文芸評論家・淪陥時期文学研究家の上官纓氏の紹介⁽¹⁾によると、本小説は1990年、疑遲が78歳の年に完成したものだという。淪陥時期文学の研究が深まるにつれて、当時の“対日協力”の作家に対する再評価の機運が熟するなか、『新民胡同』は完成の11年後に、ついに世に問う運びとなったわけである。

疑遲は「満州国」（1932年～1945年）時代に、古丁をはじめとする文芸雑誌『藝文志』の同人だった。文学史上、“藝文志派”作家という区分がある。当時の中国人作家として、もっとも活躍していた一人でもある。日本が敗戦し、「満州国」が崩壊した後に、疑遲は文筆活動から転業した。『新民胡同』の出版は約45年ぶりの作家活動だと見なされている。

『新民胡同』に接する時、作者が「満州国」時代に残した作品の数々を思い起こし、疑遲が晩年に著したこの作品の意図はどこにあるのは、吟味に値するのであろう。

『新民胡同』は「満州国」の首都だった「新京」（現在の長春市）にある下町・新民胡同を舞台とする。‘胡同’とは横町の意味である。

ストーリーは太平洋戦争勃発直後の1942年から始まり、新民胡同と関わりのあるさまざまな人物、事件を描いた一年間の物語である。スケールが大きく、中国と日本の間に、あの不幸な歴史の一コマを克明に記録されている。

小説の舞台の新民胡同は清末の宣統時代に、清政府の許可によって開かれた商業地⁽²⁾であった。『老長春』によると、新民胡同は商業地に改造された後、

各種の店舗が雨後の竹の子のように増加し、商売は繁盛した。1902年に建築された愛国茶園から名を変更した“新民戲院”とか、演劇を上演しながらお茶を楽しめる茶社として名高い“四海茶社”などは、いずれも実名で小説で登場している。

「満州国」時代の新民胡同は、疑遲自身が小説でこう描写している。

新民胡同は、たいへん狭い横町である。それは東西の通りであり、西側の半分はもっとも狭い。全長は400メートルに過ぎない。東半分より南のほうに、昔からサッカー場より少し小さめの瓦づくりの四合院がある。“九・一八”事変（日本では「満洲事変」一筆者注）以前から偽満州国建国初期まで、各種の娯楽業のありとあらゆる店舗が揃っていた。たとえば、大鼓書を演じる者、覗きからくり、占い、手紙の代筆業者、王麻子湿布屋などがあった。四合院の真ん中は漫才を興じる者や本物の刀を持った大道芸人や藪医者、歯科医による即席抜歯、などで賑わっていた。しかし、近年は、特に太平洋戦争がはじめて以来、衰えを見せている。加えて、この季節では、ちょうど寒さの真っ直中にあり、四合院はもちろんのこと、新民胡同全体は、索漠たる霧囲気に包まれている。（第三章 新市場と四海茶社、42頁。）

作者がもっとも筆を費やしたのは「三元酒店」である。店の経営者に剛直な熱血漢の曹三元と勤勉で正義感のある妻の大同姐がいる。

店は常に大勢の客で賑わっている。心の温まる熱燗を求めてやってくる貧しい労働者もいれば、暇つぶしの小市民、秘かに情報を集めに来る当局の工作人員もいる。作者は店に登場する客の仕草、会話、目つきなどを通じて、読者に時折緊張感さえをあたえるのである。彼らの会話から、生活に喘ぐ庶民の暮らしぶり、時局の変化、日本統治への不満が巧みに描かれている。庶民らの喜怒哀楽が場面ごとにひしひしと伝わってくる。

出自を隠している経営者曹夫妻は、夫・曹は廬溝橋事変（1931年7月7日、日本では「支那事変」という）の翌年に、国民党傅作義軍の兵隊をし、対日作戦で負傷したことがある。妻の大同姐は危険にもかかわらず、曹を助け出し、夫婦になった。当局の追跡を逃れるために、苦難の逃避行を乗り越え、

新民胡同で居酒屋「三元酒店」を構え、足場を固めたのである。

言論の自由が厳しく制限されている時代に、曹夫妻は客を見極め、下層社会の人々と、怪しげな人物との間に巧妙に渡り合い、その見事な応酬ぶりも目を見張るばかりである。困難な条件下に、店をうまく切り盛りする曹夫妻の頑強不屈なイメージを読者に与えている。当局の捜査包囲網が縮まり、危険が身边におよんだときに、曹夫妻は再び逃避行の道を選択した。敵に決して屈服しない愛国者として、作者が曹夫妻を設定したのである。

このほかに、「四海茶社」を取り巻く人物や出来事にもかなりの紙数を取っている。経営者の孫福貞親子、講談師の申慶嵐、「新民劇院」を舞台として、活躍している樊永澤などの京劇俳優である。

申慶嵐と樊永澤は民族愛国芸能人として、描かれている。上官櫻氏の調べによると、⁽³⁾申慶嵐と樊永澤はどちらも実在の人物であり、本名は金慶嵐と樊永在である。金慶嵐は長期にわたって、“新京”の東四馬路にある宝山茶社、新民胡同の四海茶社で長編歴史小説『水滸伝』と『大宋八義』を講談していた。後に、瀋陽に移り、解放後（1949年から共産党が政権を掌握した後）は行方不明になった。小説は金慶嵐の経歴を尊重しながら、講談師として、自分の憂国の思いを歴史小説に託し、生き生きとした口調で観客の好評を博すかわら、当局の圧力にけっして頭を下げようとしない硬骨男を、芸術的に加工し、申慶嵐という人物として登場させている。京劇俳優の樊永澤は芸術を熱愛し、正義感が溢れている。彼のモデルとなった樊永在は生活の中でも、人望の厚い芸人として広く世間に伝わっている。小説の中では、京劇の曲目や台詞などの紹介が非常に詳しい。これは作者のほかの作品や回想録から、京劇がたびたび登場することから、作者疑遲自身の京劇に対する愛着と造詣の深さが感じられる。

このほかに、徴兵されて死に直面し落胆している現役日本兵、狡猾な日本憲兵・特務、日本人の手先に甘んじ、同胞を売る無骨な中国人など、反面人物の登場も数多い。これらの人物はいずれも凶暴な面持ちであり、人物像には厚みがなく、精彩に欠けているのがいささか残念に思う。小説にもう少し緊張感をもたせたほうが、小説として引き締まった感じがするのではなからうか。

疑遲は「満州国」時代に、“藝文志派”の主将として、大変な活躍ぶりを

見せ、活字になった作品は数多く残されている。特に1939年、大型文芸誌『藝文志』の発刊後、同人として活躍していた疑遅が、「満州国」後期に発表した数々の作品の一部は、その対日協力的な姿勢によって、時代時代に「漢奸文学」の典型として批判の矢面に立たれてきた。解放後、新中国文壇から遠く離れたかのように、筆を取ることは一切なくなったのである。45年もの歳月が過ぎ去った今日、疑遅は再び筆を取った。晩年にこのような抗日愛国小説を書く真意はどこにあるのだろうか。

疑遅は本名が劉玉璋。1913年1月。遼寧省鉄嶺県生まれ。幼少時代はハルビンで過ごした。道外食糧工会私立職業学校、東省特別区第三中学、中東鉄道車務専科学校を卒業。以後しばらく中東鉄道に勤務をしていた。

彼が学んだ中東鉄道車務専科学校は中国とロシアが合同で経営した学校であり、彼はそこでロシア語を習得した。この頃から、彼は多くの文学作品に触れ、特にロシア文学の強い影響を受けて、文学の道を志したものと見られる。1937年からはじめて劉郎というペンネームで雑誌『明明』にロシア文学をいくつか翻訳した。以後の作品創作に夷馳、疑遅というペンネームを使用する。1949年以後に、劉遅という名前に改め、映画関係の仕事に従事していたという。

疑遅の文学活動は30年代半ばから始まっている。当時は、仕事で一緒だった同僚の古丁、藤更（外文）と文学の趣向があり、3人で読書会をつくり、所謂「芸術研究会」を組織したのである。その時の気持ちを『花月集』（月刊満洲社 1938年）発刊の序「わたしの創作について」のなかでこう回想している。

われわれは苦悶している。当然、それぞれの苦悶には、それぞれの特殊な出発点があるはずだ。口を持っているにもかかわらず、われわれは“おし”か“どもり”だ。目があるにもかかわらず、われわれはいつも“盲目”だ。“盲目”でなければ、近眼か遠視だ。耳があるにもかかわらず、われわれは“つんぼ”だ。われわれは健全な官能を持った“不具な人間”だ。（中略）われわれは苦悶している。われわれは苦悶を延長するのではなく、昇華すべきだ。科学的な芸術理論は「苦悶の昇華は芸術である」ことを肯定していないが、われわれは苦悶の昇華は芸術とす

る。

ここには文学の才能を発揮できず、苦悩している一群の文学青年の姿が映し出されている。

1937年「芸術研究会」のメンバーたちと雑誌『明明』の編集・創作に励んでいた。翌年に雑誌が停刊した。1939年に藝文志事務所に参加し、雑誌『藝文志』を中心に創作活動をしていた。1940年に『麒麟』、『映画画報』を編集した。

1937年から1943年までの創作は彼の前期作品だと見なされている。それは短編小説集『花月集』(1938年)、『風雪集』(1941年)、『天雲集』、長編小説『同心結』(1943年)である。『花月集』が10編、『風雪集』が11編、『天雲集』には8編の短編が収録されている。

疑遅の大部分の作品は“郷土文学”だと評価されている。東北大地の特有な濃厚な色彩をもって、下層社会で喘ぐ人々の苦しむ姿、黒い大地の息吹を描くのが疑遅文学においてもっとも成熟している部分である。

『明明』第三期に発表した『山丁花』は、当時の満洲文壇で、「郷土文学の佳作」だと評され、「郷土文芸論争」にまで発展したのである。その時点から、「郷土文学作家」の地位を獲得したのである。

同時代の作家陳因は『満洲作家論集』の中で、疑遅に対して、適切な批評を下している。創作の題材についてこう述べている。⁽⁴⁾

けっして浪費をしたり、誇張したりしない。常に華麗とは言えないような題材を選び、色のついていないペンで紙に書いている。夷馳は始終自分が探し求めている素朴なテーマを選び、華麗で、不必要なものを取り除いている。(中略)

夷馳の筆は社会を突き破っている。その中から出てきたのは、美酒ではなく、苦汁である。以前、筆者は夷馳君をこう評価したことがある。強い筆致をもって、荒っばいあらずじ、簡単な輪郭によって、立派な荒原の流民図を仕上げている。また、冷たさと熱さが織り交ぜた血流によって、森林を開墾している群像図を色づけた。前者は『北荒』のことであり、後者は『山丁花』のことである。

現代の東北淪陥時期文学評論においても、疑遲を東北郷土文学の象徴としている。しかし、疑遲などの“藝文志派”作家を再評価する過程の中で、過去に彼らを一律に“漢奸文人”とされる時代とうっと変わって、業績を褒め讃える声ばかりが聞こえてくる傾向がやや強いようである。疑遲の後期創作について極力不都合な部分を迂回し、「東北郷土文学」の旗手にマイナスイメージを与えないようにしている。

1943年に入ってから、太平洋戦争は、戦況が少しずつ思わしくなくなってきた。「満州国」内においても、「芸文指導要綱」等の公布によって、文芸に対する取り締まりはいっそう厳しくなってきた。同人雑誌『藝文志』は、1939年6月に創刊して以来、純文学同人誌として1941年まで文学活動が続いていた。しかし、1943年5月に、満洲文芸家協会の機関誌として、再び発刊のスタートを切ったのである。この時点から『藝文志』が従来持っていた芸術性が完全に奪われてしまい、単なる当局の代弁者だけの存在となった。不幸なことに疑遲は、この政治と深く関わった場所から離れようとはしなかったのである。

この頃に発表された作品も少なくない。1943年7月の『藝文志』（第一巻・第八号）に『敵愾與童心』を書いた。同年の第一巻，第9号，10号，11号に、凱歌シリーズの『曙』、『望』、『明』を連載した。

『曙』を例として見てみよう。

沙嶺屯の中国人地主呉海亭は日本開拓団の地主谷森と手を取り合い、村の人々を率いて、政府の戦時下の呼びかけに応える「勤労増産」のストーリーが展開されている。中国人と日本人は家族のように親しくつき合い、助け合う熱い場面が繰り広げられる。正真正銘の国策に沿った模範作品であることは疑いをもたないだろう。登場人物はどれも読者に強烈な印象を与えるとは言えず、会話も紋切り型のところが随所に見られる。芸術性の有無はまったく論外のことである。けん銃を突き付けられる条件下では、不本意ながらの作品であろう。

しかし、同様に太平洋戦争勃発後を背景に、45年後に書いたまったく主旨の違った『新民胡同』では、読者の目に映っているのは、厭戦の日本軍、日本の統治への憎悪、日本からの開拓団に土地を取られることに怯えている中国人地主である。作者は高齢であるにもかかわらず、余生に誕生させた『新

民胡同』では、かつての対日協力への総決算と懺悔にもつながる。これは今まで不本意に書いた対日協力の作品が人々に与えた“漢奸文学”、“漢奸文人”とのイメージを払拭しようとする必死の努力であろう。

『新民胡同』の発表は“藝文志派”作家に対する認識が深まりつつある時期にあたりと言えよう。彼らは東北淪陷期文学の中では、もっとも複雑な一群であり、長年に渡り、民族の裏切り者として、お倉入りをさせられてしまったのである。今日の研究では、彼らの“対日協力”の創作は当局の重圧のもとで行われた事実を視野に入れて、より客観的に全面的に彼らの文学を再評価している。

「満洲文壇」をありのままに凝視することは、「満州国」の実態を解明するのに、不可欠の一部分だと思われる。そういう意味において『新民胡同』の出版は、文学的にも、歴史的にも十分なる参考価値があると考えられる。

註

- (1) 『新民胡同』の「劉暹と『新民胡同（序文）』」による。
- (2) 『老長春』（楊子枕著 延辺人民出版社 2000年12月「老長春記事之四 新民胡同 187頁～193頁」参考。）
- (3) 注(1)と同じ。
- (4) 『満洲作家論集』（陳因著 1943年 318頁～319頁。）

（大谷大学助教授）